

国家と石綿

写真は 2016 年 11 月に現代書館から刊行された、永尾俊彦氏によるアスベスト被害者「息ほしき人々」の闘いのルポである。舞台は関西国際空港に近い泉南地域。このあたりは大学院生の頃、調査や家庭教師などで馴染みがある。350 ページを超す心にせまるルポであり、紹介したことは多いが、まずは「まえがき」から。



見ようとしなければ見えない現実がある。同様に、見ようとしなければ見えない歴史もある。石綿産業の歴史とは、まさしく見ようとしなければ見えない歴史だった。

石炭産業や鉄鋼産業などと並び、明治以降の日本の近代化や工業化を支えた重要な産業の一つが石綿産業であった。たとえば、工場のボイラーの断熱材やパイプのパッキン（詰め物）に石綿製品は不可欠だった。石綿がなければ工場は動かないのだ。



にもかかわらず、石綿問題の取材を始めてから、石綿産業の歴史を調べようと資料を探したが、その歴史についてのまとまった書物や研究書がほとんどないことに驚いた。

統計書などでも、石綿紡織業が独立した業種に産業分類されておらず、紡織業や窯業の中に含まれている場合もあった。石炭産業や鉄鋼産業については膨大な文献の蓄積があるのに、石綿産業の歴史は黙殺されるかのように日本の近代史からすっぽり欠落していた。その被害も一般には知られていなかった。

2005 年、「クボタショック」が起きる。農機具メーカー・クボタの兵庫県尼崎市にあった工場の周辺住民が、飛散した石綿で中皮腫というがんを発症して亡くなっている「石綿公害」が発覚したのだ。この工場では石綿で強度を強めた水道管を製造していた。以後、全国各地で石綿による被害が続々と明らかになっていく。当初は、わたしも尼崎のクボタの被害者の取材をしていた。その後、泉南地域にも被害者が多数いるらしいという聞き、泉南の取材も始めた。おそらく、クボタショックがなければ泉南の石綿産業の歴史とは被害の実態は埋もれたままだっただろう。

そのクボタショックのあった 2005 年に、日本で最初の石綿工場である栄屋石綿紡織所が廃業し、泉南の石綿産業は 1 世紀の歴史に幕をおろした。

今、泉南地域のかつての石綿工場の多くは、駐車場やパチンコ店などになっている。被害者も次々に亡くなっている。

とはいえ、まだ存命の人もいるし、遺族もいる。支援者や弁護士らは被害者や遺族を

探し出し、聞き取り調査を始めた。被害者や遺族が語ることで、少しずつ泉南の石綿被害の実態や石綿産業の歴史もつまびらかになってきた。同時に、弁護士や支援者、研究者らの調査によって国策としての石綿産業の歴史や国の責任も明らかになってきた。

泉南は、日本の石綿紡織業の発祥の地で、在日朝鮮人や同和地区の人々、離島やへき地の出身者、炭鉱離職者などが多数働いていた。中には文字すら読めない人もいた。そのような貧しく仕事を選べなかった人々が泉南に吸い寄せられるようにして集まってくる構造があった。

そして、国は戦前から泉南の石綿工場の被害のすざまじい実態を調査し、よく把握していた。

しかし、有効な対策をとらなかった。労働者や石綿工場の近隣住民らは石綿の病を得て普通に呼吸することすらできずに亡くなっていき、あるいは息も絶え絶えに苦しんでいた。

このような差別の上に石綿産業はあり、わが国の近代化があった。しかも他産業と違って歴史すら残されず、黙殺されていた。これ以上の差別があるだろうか。この点で、石綿産業は日本の近代化の象徴と言えるかもしれない。

だが、「息ほしき」人々は立ちあがった。

2006年、被害者と遺族は国の責任を問う「大阪泉南石綿国家賠償請求訴訟」を提訴した。そして、弁護士、支援者と共に闘い、見事に歴史的な勝利を収めた。

本書は歴史から黙殺されていた人々が立ち上がり、歴史を語り、歴史を創った記録だ。

(2017年3月21日)